

夏目漱石

吾輩は猫である



吾輩は猫である。名前はまだ無い。

どこで生れたかとうと見当がつかぬ。何でも薄暗いじめじめした所でニャーニャー泣いていた事だけは記憶している。吾輩はここで始めて人間というものを見た。しかも三とで聞くとそれは書生という人間で一番癡悪な種族であったそうだ。この書生というのは時々我々を捕えて煮て食うという話である。しかしその当時は何という考もなかったから別段恐いとも思わなかった。ただ彼の掌に載せられてスーと持ち上げられた時何だかフワフワした感じがあったばかりである。掌の上で少し落ちついて書生の顔を見たのがいわゆる人間というものを見始であろう。この時妙なものだと思つた感じが今でも残っている。第一毛をもつて裝飾されべきはずの顔がつるつるしてまるで薬缶だ。その後猫にもだいぶ逢つたがこんな片輪には一度も出会わした事がない。のみならず顔の真中があまりに突起している。そしてその穴の中から時々ふうふうと煙を吹く。どうも咽せぼくて実に弱つた。これが人間の飲む煙草というものである事はようやくこの頃知つた。

この書生の掌の裏でしばらくはよい心持に坐っておつたが、しばらくすると非常な速力で運転のか

自分だけが動くのか分らないが無暗むやみに眼が廻る。胸が悪くなる。到底助とうていからな思っていると、どきりと音がして眼から火が出た。それまでは記憶しているがあとは何の事やらいくら考え出そうとしても分らない。

ふと気が付いて見ると書生はいない。たくさんおつた兄弟が一疋びきも見えぬ。肝心かんじんの母親さえ姿を隠してしまった。その上今までの所とは違つて無暗むやみに明るい。眼を明いていられぬくらいだ。はてな何でも容子ようすがおかしいと、のそのそ這はい出して見ると非常に痛い。吾輩は藁わらの上から急に笹原の中へ棄てられたのである。

ようやくの思いで笹原を這い出すと向うに大きな池がある。吾輩は池の前に坐つてどうしたらよろうと考えて見た。別にこれという分別ぶんべつも出ない。しばらくして泣いたら書生がまた迎に来てくれるかと考え付いた。ニヤー、ニヤーと試みにやつて見たが誰も来ない。そのうち池の上をさらさらと風が渡つて日が暮れかかる。腹が非常に減つて来た。泣きたくても声が出ない。仕方がない、何でもよいから食物くいのもののある所まであるこうと決心をしてそろりそろりと池を左ひだりりに廻り始めた。どうも非常に苦しい。そこを我慢して無理やりに這はつて行くとようやくの事で何となく人間臭い所へ出た。ここへ這入はいつたら、どうにかなると思つて竹垣くすの崩れた穴から、とある邸内がしにもぐり込んだ。縁は不思議なもので、もしこの竹垣が破れていなかつたなら、吾輩はついに路傍ろぼうに餓死したかも知れのである。一樹の蔭とはよく云いつたものだ。この垣根の穴は今日こんにちに至るまで吾輩が隣家となりの三毛を訪問する時の通路になつてゐる。さ

て邸へは忍び込んだものこれから先どうして善いか分らない。そのうちに暗くなる、腹は減る、寒さは寒し、雨が降って来るといふ始末でもう一刻の猶予が出来なくなった。仕方がないからとにかく明るくて暖かそうな方へ方へとあるいて行く。今から考えるところの時はすでに家の内に這入っておったのだ。ここで吾輩は彼の書生以外の人間を再び見るべき機会に遭遇したのである。第一に逢ったのがおさんである。これは前の書生より一層乱暴な方で吾輩を見るや否やいきなり頸筋をつかんで表へ抛り出した。いやこれは駄目だと思つたから眼をねぶつて運を天に任せ。しかしひもじいのと寒いのはどうしても我慢が出来ん。吾輩は再びおさんの隙を見て台所へ這上つた。すると間もなくまた投げ出された。吾輩は投げ出されては這い上り、這い上つては投げ出され、何でも同じ事を四五遍繰り返したのを記憶している。その時におさんと云う者はつくづくいやになつた。この間おさんの三馬を偷んでこの返報をしてやつてから、やつと胸の痞が下りた。吾輩が最後につまみ出されようとしたときに、この家の主人が騒々しい何だといひながら出て来た。下女は吾輩をぶら下げて主人の方へ向けてこの宿なしの小猫がいくら出しても出しては御台所へ上つて来て困りますという。主人は鼻の下の黒い毛を撫りながら吾輩の顔をしばらく眺めておつたが、やがてそんなら内へ置いてやれといったまま奥へ這入ってしまった。主人はあまり口を聞かぬ人と見えた。下女は口惜しそうに吾輩を台所へ抛り出した。かくして吾輩はついにこの家を自分の住家と極める事にしたのである。

吾輩の主人は滅多に吾輩と顔を合せる事がない。職業は教師だそうだ。学校から帰ると終日書齋に

這入ったぎりほとんど出て来る事がない。家のものは大変な勉強家だと思つてゐる。当人も勉強家であるかのごとく見せてゐる。しかし實際はうちのものがいうような勤勉強家ではない。吾輩は時々忍び足に彼の書齋を覗いて見るが、彼はよく昼寝をしてゐる事がある。時々読みかけてある本の上に涎をたらしている。彼は胃弱で皮膚の色が淡黄色を帯びて弾力のない不活潑な徴候をあらわしてゐる。その癖に大飯を食う。大飯を食つた後でタカジヤスターゼを飲む。飲んだ後で書物をひろげる。二三ページ読むと眠くなる。涎を本の上へ垂らす。これが彼の毎夜繰り返す日課である。吾輩は猫ながら時々考える事がある。教師というものは実に楽なものだ。人間と生れたら教師となるに限る。こんな寝ていて勤まるものなら猫にでも出来ぬ事はないと。それでも主人に云わせると教師ほどつらいものはないそうで彼は友達が来る度に何とかかんとか不平を鳴らしている。

吾輩がこの家へ住み込んだ当時は、主人以外のものにははなはだ不人望であつた。どこへ行つても跳ね付けられて相手にしてくれ手がなかつた。いかに珍重されなかつたかは、今日に至るまで名前さえつけてくれないのでも分る。吾輩は仕方がないから、出来得る限り吾輩を入れてくれた主人の傍に居る事をつとめた。朝主人が新聞を読むときは必ず彼の膝の上に乗る。彼が昼寝をするときは必ずその背中に乗る。これはあながち主人が好きという訳ではないが別に構い手がなかつたからやむを得るのである。その後いろいろ経験の上、朝は飯櫃の上、夜は炬燵の上、天気の良い日は椽側へ寝る事とした。しかし一番心持の好いのは夜に入つてここのうちの小供の寢床へもぐり込んでいっしょにねる事である。この

小供というのは五つと三つで夜になると二人が一つ床へ入って一間へ寝る。吾輩はいつでも彼等の中間に己れを容るべき余地を見出してどうか、こうにか割り込むのであるが、運悪く小供の一人が眼を醒ますが最後大変な事になる。小供は——ことに小さい方が質がわるい——猫が来た猫が来たといって夜中でも何でも大きな声で泣き出すのである。すると例の神経胃弱性の主人は必ず眼をさまして次の部屋から飛び出してくる。現にせんだってなどは物指で尻べたをひどく叩かれた。

吾輩は人間と同居して彼等を観察すればするほど、彼等は我儘なものだと断言せざるを得ないようになった。ことに吾輩が時々同衾する小供のごときに至っては言語同断である。自分の勝手な時は人を逆さにしたたり、頭へ袋をかぶせたり、抛り出したり、へっついの中へ押し込んだりする。しかも吾輩の方で少しでも手出しをしエウものなら家内総がかりで追い廻して迫害を加える。この間もちよつと畳で爪を磨いたら細君が非常に怒ってそれから容易に座敷へ入れない。台所の板の間で他が顫えていても一向平気なものである。吾輩の尊敬する筋向の白君などは逢う度毎に人間ほど不人情なものはないと言っておらるる。白君は先日玉のような子猫を四疋産まれたのである。ところがその家の書生が三日目にそいつを裏の池へ持って行って四疋ながら棄てて来たそうだ。白君は涙を流してその一部始終を話した上、どうしても我等猫族が親子の愛を完くして美しい家族的生活をするには人間と戦つてこれを剿滅せねばならぬといわれた。一々もつとも議論と思う。また隣りの三毛君などは人間が所有権という事を解していないといつて大に憤慨している。元来我々同族間では目刺の頭でも鰯の臍でも一番先に見付

けたものがこれを食う権利があるものとなっている。もし相手がこの規約を守らなければ腕力に訴えて善いぐらいのものだ。しかるに彼等人間は毫もこの觀念がないと見えて我等が見付けた御馳走は必ず彼等のために掠奪せらるるのである。彼等はその強力を頼んで正当に吾人が食い得べきものを奪つてすましている。白君は軍人の家におり三毛君は代言の主人を持っている。吾輩は教師の家に住んでいるだけ、こんな事に關すると両君よりもむしろ楽天である。ただその日その日がかこうにか送られればよい。いくら人間だつて、そういつまでも榮える事もあるまい。まあ氣を永く猫の時節を待つがよからう。

我儘で思い出したからちよつと吾輩の家の主人がこの我儘で失敗した話をしよう。元來この主人は何といつて人に勝れて出来る事もないが、何にでもよく手を出したがる。俳句をやつてほととぎすへ投書をしたり、新体詩を明星へ出したり、間違いだらけの英文をかいたり、時によると弓に凝つたり、謡を習つたり、またあるときはヴァイオリンなどをブーブー鳴らしたりするが、氣の毒な事には、どれもこれも物になつておらん。その癖やり出すと胃弱の癖にいやに熱心だ。後架の中で謡をうたつて、近所で後架先生と渾名をつけられているにも関せず一向平氣なもので、やはりこれは平の宗盛にて候を繰返している。みんながそら宗盛だと吹き出すくらいである。この主人がどういう考になつたのか吾輩の住み込んでから一月ばかり後のある月の月給日に、大きな包みを提げてあわただしく帰つて来た。何を買つて来たのかと思うと水彩絵具と毛筆とワットマンという紙で今日から謡や俳句をやめて絵をかく決心と見えた。果して翌日から当分の間というものは毎日毎日書齋で昼寝もしないで絵ばかりかいている。

しかしそのかき上げたものを見ると何をかいたものやら誰にも鑑定がつかない。当人もあまり甘くないと思つたものか、ある日その友人で美学とかをやっている人が来た時に下の様な話をして聞いた。

「どうも甘くかけないものだね。人を見ると何でもないようだが自ら筆をとつて見ると今更のようにならずかしく感ずる」これは主人の述懐である。なるほど詐りのない処だ。彼の友は金縁の眼鏡越しに主人の顔を見ながら、「そう初めから上手にはかけないさ、第一室内の想像ばかりで画がかける訳のものではない。昔以太利の大家アンドレア・デル・サルトが言つた事がある。画をかくなら何でも自然その物を写せ。天に星辰あり。地に露華あり。飛ぶに禽あり。走るに獸あり。池に金魚あり。枯木に寒鴉あり。自然はこれ一幅の大活画なりと。どうだ君も画らしい画をかこうと思ふならちと写生をしたら」

「へえアンドレア・デル・サルトがそんな事をいつた事があるかい。ちつとも知らなかつた。なるほどこりやもつともだ。実にその通りだ」と主人は無暗に感心している。金縁の裏には嘲けるような笑が見えた。

その翌日吾輩は例のごとく椽側に出て心持善く昼寝をしていたら、主人が例になく書齋から出て来て吾輩の後ろで何かしきりにやっている。ふと眼が覚めて何をしているかといふばかり細目に眼をあけて見ると、彼は余念もなくアンドレア・デル・サルトを極め込んでいる。吾輩はこの有様を見て覚ええず失笑するのを禁じ得なかつた。彼は彼の友に揶揄せられたる結果としてまず手初めに吾輩を写生しつつ

あるのである。吾輩はすでに十分寝た。欠伸がしたくてたまらない。しかしせっかく主人が熱心に筆を執っているのを動いては気の毒だと思つて、じつと辛棒しておつた。彼は今吾輩の輪廓をかき上げて顔のあたりを色彩っている。吾輩は自白する。吾輩は猫として決して上乘の出来ではない。背といひ毛並といひ顔の造作といひあえて他の猫に勝るとは決して思つておらん。しかしいくら不器量の吾輩でも、今吾輩の主人に描き出されつつあるような妙な姿とは、どうしても思われぬ。第一色が違う。吾輩は波斯産の猫のごとく黄を含める淡灰色に漆のごとき斑入りの皮膚を有している。これだけは誰が見ても疑うべからざる事実と思ふ。しかるに今主人の彩色を見ると、黄でもなければ黒でもない、灰色でもなければ褐色でもない、さればとてこれらを交ぜた色でもない。ただ一種の色であるというよりほかに評し方のない色である。その上不思議な事は眼がない。もつともこれは寝ているところを写生したのだから無理もないが眼らしい所さえ見えないから盲猫だか寝ている猫だか判然しないのである。吾輩は心中ひそかにいくらアンドレア・デル・サルトでもこれではしようがないと思つた。しかしその熱心には感服せざるを得ない。なるべくなら動かずにおつてやりたいと思つたが、さつきから小便が催うしている。身内の筋肉はむずむずする。最早一分も猶予が出来ぬ仕儀となつたから、やむをえず失敬して両足を前へ存分にして、首を低く押し出してあーあと大なる欠伸をした。さてこうなつて見ると、もうおとなしくしていても仕方がない。どうせ主人の予定は打ち壊したのだから、ついでに裏へ行つて用を足そうと思つてのそのそ這い出した。すると主人は失望と怒りを掻き交ぜたような声をして、座敷の中から「こ

の馬鹿野郎」と怒鳴った。この主人は人を罵るときは必ず馬鹿野郎というのが癖である。ほかに悪口の言いようを知らないのだから仕方がないが、今まで辛棒した人の気も知らないで、無暗に馬鹿野郎呼わりは失敬だと思う。それも平生吾輩が彼の背中へ乗る時に少しは好い顔でもするならこの漫罵も甘んじて受けるが、こっちの便利になる事は何一つ快くしてくれた事もないのに、小便に立ったのを馬鹿野郎とは酷い。元來人間というものは自己の力量に慢じてみんな増長している。少し人間より強いものが出て来て窘めてやらなくてはこの先どこまで増長するか分らない。

我儘もこのくらいなら我慢するが吾輩は人間の不徳についてこれよりも数倍悲しむべき報道を耳にした事がある。

吾輩の家の裏に十坪ばかりの茶園がある。広くはないが瀟洒とした心持ち好く日の当る所だ。うちの小供があまり騒いで楽々昼寝の出来ない時や、あまり退屈で腹加減のよくない折などは、吾輩はいつでもここへ出て浩然の気を養うのが例である。ある小春の穏かな日の二時頃であったが、吾輩は昼飯後快よく一睡した後、運動かたがたこの茶園へと歩を運ばした。茶の木の根を一本一本嗅ぎながら、西側の杉垣のそばまでくると、枯菊を押し倒してその上に大きな猫が前後不覚に寝ている。彼は吾輩の近づくのも一向心付かざるとく、また心付くも無頓着なるとく、大きな躰をして長々と体を横えて眠っている。他の庭内に忍び入りたるものがかくまで平気に睡られるものかと、吾輩は窃かにその大胆なる度胸に驚かざるを得なかった。彼は純粹の黒猫である。わずかに午を過ぎたる太陽は、透明なる光線を

彼の皮膚の上に抛げかけて、さらさらする柔毛の間より眼に見えぬ炎でも燃え出ずるように思われた。彼は猫中の大王とも云うべきほどの偉大なる体格を有している。吾輩の倍はたしかにある。吾輩は嘆賞の念と、好奇の心に前後を忘れて彼の前に佇立して余念もなく眺めしていると、静かなる小春の風が、杉垣の上から出たる梧桐の枝を軽く誘ってばらばらと二三枚の葉が枯菊の茂みに落ちた。大王はかつとその真丸の眼を開いた。今でも記憶している。その眼は人間の珍重する琥珀というものよりも遙かに美しく輝いていた。彼は身動きもしない。双眸の奥から射るごとき光を吾輩の矮小なる額の上にあつめて、御めえは一体何だと云った。大王にしては少々言葉が卑しいと思つたが何しろその声の底に犬をも挫しぐべき力が籠っているので吾輩は少なからず恐れを抱いた。しかし挨拶をしないと険呑だと思つたから「吾輩は猫である。名前はまだない」となるべく平氣を装つて冷然と答えた。しかしこの時吾輩の心臓はたしかに平時よりも烈しく鼓動しておつた。彼は大に輕蔑せる調子で「何、猫だ？ 猫が聞いてあきらめらあ。全てどこに住んでるんだ」随分傍若無人である。「吾輩はこの教師の家にいるのだ」「どうせそんな事だろうと思つた。いやに瘠せてるじゃねえか」と大王だけに氣焔を吹きかける。言葉付から察するとどうも良家の猫とも思われぬ。しかしその膏切つて肥満しているところを見ると御馳走を食つてゐるらしい、豊かに暮しているらしい。吾輩は「そう云う君は一体誰だい」と聞かざるを得なかつた。「己れあ車屋の黒よ」昂然たるものだ。車屋の黒はこの近辺で知らぬ者なき乱暴猫である。しかし車屋だけに強いばかりでちつとも教育がないからあまり誰も交際しない。同盟敬遠主義の的になつてゐる奴

だ。吾輩は彼の名を聞いて少々尻こそばゆき感じを起すと同時に、一方では少々輕侮の念も生じたのである。吾輩はまず彼がどのくらい無学であるかを試してみようと思つて左の問答をして見た。

「一体車屋と教師とはどっちがえらいだろう」

「車屋の方が強いに極つていらあな。御めえのうちの主人を見ねえ、まるで骨と皮ばかりだぜ」

「君も車屋の猫だけに大分強そうだ。車屋にいると御馳走が食えると見えるね」

「何におれなんぞ、どこの国へ行つたつて食い物に不自由はしねえつもりだ。御めえなんかも茶壘ばかりぐるぐる廻つていねえで、ちつと己の後へくつ付いて来て見ねえ。一と月とたたねえうちに見違えるように太れるぜ」

「追つてそう願う事にしよう。しかし家は教師の方が車屋より大きいのに住んでいるように思われる」

「篋棒め、うちなんかいくら大きくたつて腹の足しになるもんか」

彼は大に肝癪に障つた様子で、寒竹をそいだよな耳をしきりとびく付かせてあららかに立ち去つた。

吾輩が車屋の黒と知己になつたのはこれからである。

その後吾輩は度々黒と邂逅する。邂逅する毎に彼は車屋相当の気焰を吐く。先に吾輩が耳にしたという不徳事件も実は黒から聞いたのである。

或る日例のごとく吾輩と黒は暖かい茶壘の中で寝転びながらいろいろ雑談をしていると、彼はいつもの自慢話をさも新しそうに繰り返したあとで、吾輩に向つて下のごとく質問した。「御めえは今ま

ずに鼠を何匹とった事がある」智識は黒よりも余程発達しているつもりだが腕力と勇氣とに至っては到底黒の比較にはならないと覚悟はしていたものの、この間に接したる時は、さすがに極りが善くはなかつた。けれども事實は事實で詐る訳には行かないから、吾輩は「実はとうとうとうと思つてまだ捕らない」と答えた。黒は彼の鼻の先からびんと突張っている長い髭をびりびりと震わせて非常に笑つた。元來黒は自慢をする丈にどこか足りないところがあつて、彼の氣焰を感じたように咽喉をころころ鳴らして謹聴していればはなはだ御しやすい猫である。吾輩は彼と近付になつてから直にこの呼吸を飲み込んだからこの場合にもなまじい己れを弁護してますます形勢をわるくするのも愚である、いつその事に彼に自分の手柄話をしゃべらして御茶を濁すに若くはないと思案を定めた。そこでおとなしく「君などは年が年であるから大分とつたろう」とそそのかして見た。果然彼は墻壁の欠所に吶喊して来た。「たんとでもねえが三四十はとつたろう」とは得意氣なる彼の答であつた。彼はなお語をつづけて「鼠の百や二百は一人でいつでも引き受けるがいたちつてえ奴は手に合わねえ。一度いたちに向つて酷い目に逢つた」「へえなるほど」と相槌を打つ。黒は大きな眼をぱちつかせて云う。「去年の大掃除の時だ。うちの亭主が石灰の袋を持つて椽の下へ這い込んだら御めえ大きな私たちの野郎がめん喰つて飛び出したと思ひねえ」「ふん」と感心して見せる。「いたちつてけども何鼠の少し大きいぐれえのものだ。こん畜生つて氣で追っかけてとうとう泥溝の中へ追い込んだと思ひねえ」「うまくやつたね」と喝采してやる。「ところが御めえいざつてえ段になると奴め最後つ尻をこきやがった。臭えの臭くねえのつてそれからつて

えものはいたちを見ると胸が悪くならあ」彼はここに至つてあたかも去年の臭気を今いまなお感ずることく前足を揚げて鼻の頭を二三遍まで廻わした。吾輩も少々気の毒な感じがする。ちつと景気を付けてやろうと思つて「しかし鼠なら君に睨にらまれては百年目だろう。君はあまり鼠を捕とるのが名人で鼠ばかり食うものだからそんなに肥つて色つやが善いのだろう」黒の御機嫌をとるためのこの質問は不思議にも反対の結果を呈出した。彼は喟然きぜんとして大息たいそくしていう。「考かんげえるとつまらねえ。いくら稼いで鼠をとつたつて——一てえ人間ほどふてえ奴は世の中にいねえぜ。人のとつた鼠をみんな取り上げやがつて交番へ持つて行きやあがる。交番じゃ誰が捕とつたか分らねえからそのたんびに五錢ずつくれるじゃねえか。うちの亭主なんか己の御蔭でもう壹円五十錢くらい儲けていやがる癖に、碌ろくなものを食わせた事もありやしねえ。おい人間でもあ体の善い泥棒だぜ」さすが無学の黒もこのくらいの理窟りくつはわかると見えてすこぶる怒おこつた容子ようすで背中せなかの毛を逆立さかだてている。吾輩は少々気味が悪くなつたから善い加減かへんにその場を胡魔化ごまかして家へ帰うちつた。この時から吾輩は決して鼠をとるまいと決心した。しかし黒の子分こぶんになつて鼠以外の御馳走ごちそうを獵あさつてあるく事もしなかつた。御馳走ごちそうを食うよりも寝ていた方が気楽きらくでいい。教師の家にいると猫も教師のような性質せいしやうになると見える。要心ようしんしないと今に胃弱いじやくになるかも知れない。

教師といえは吾輩の主人も近頃ちかごろに至いたつては到底水彩画すいそくがにおいて望のぞみない事を悟さとつたものと見えて十二月一日の日記にっぴにこんな事をかきつけた。

〇〇と云う人に今日の会で始めて出逢であつた。あの人は大分放蕩だいぶんほうとうをした人だと云うがなるほど通人つうじんらし